文は信なり

日本クリスチャン・ペンクラブ（略称 JCP）発行・責任者　池田勇人
事務局　〒131-0043　東京都墨田区立花 4-6-13　三浦喜代子方
TEL&FAX　03-3616-8621　郵便振替 00170-0-161838
ホームページアドレス・http://jcp.daa.jp

＊春の雨を待ち望む＊

池田勇人

めぐみの露のおきそいて
こころの畑の　しげりなば
みのるよき実にことの葉に
常にあらわさん　みさかえを
（讃美歌四一三番二節）

主の紀元二〇〇五年、おめでとうございます。本年も励まし合いつつ、主のみ栄のためにペンを握りましょう。

昨春から求道していた青年が、クリスマス礼拝で受洗しました。親から見放された彼は、いじめにもあいますが、暴走族の総長やロックグループのベースを担当。ヤクザの世界でも活躍しますが、覚醒剤で三度刑務所のお世話になり、やがて堅気になります。主イエス様によって救われた彼は、中高生の覚醒剤防止のため、またヤクザのため生涯を主にささげたいと新しいビジョンに燃えています。やっと神さまから人生の春をもどしていただいた彼のために、どうぞお祈りください。以前に出した音楽ＣＤの中で、彼は尾崎豊のような作詞を四曲手がけています。いつか私達の仲間に加わる日が来るかもしれません。

＊

春を意味する英語はスプリングで、はずむ様子が感じられますが、やまと言葉には、もっと豊かな響きがあるようです。天気がよくなったりする「晴る」、芽がふくらむ「張る」、田畑を耕して開く「墾る」・・・・いずれの「はる」も明るく、見通しがよくなるという意味があるわけです。冬が去って空が明るくなり、草木は芽ぐみ、心がうきうきしてくるので、それもまた「はる、春」と名づけたと考えられます。（『ひらがなで読めばわかる日本語のふしぎ』　中西進著　小学館参照）

聖書のヘブル語ではマルコーシュが春ですが、パレスチナには夏と冬の二季しかなく、わずかな四月の春の雨をもマルコーシュといいます。「ほら、冬は過ぎ去り、大雨も通り過ぎて行った。地には花が咲き乱れ、歌の季節がやって来た。山鳩の声が、私たちの国に聞こえる。」（雅歌二・一一、一二）「大雨、後の雨」とも訳されますが、収穫前の小麦の穂に、実がしっかりと入るために必要な雨なのです。

＊

今私共のペンクラブは、長い冬の眠りから覚めて、春の雨を受けようとしているのではないかと思います。内部充実という収穫の実を得るために、私共の互いの心とわざとが堅く結び合わされますように祈りましょう。さらにキリスト教界の中で、確固とした市民権と立場を持つことができますように。そのためにはＪＣＰのビジョンが、諸教会に浸透してゆかねばなりません。キリスト教年鑑や諸雑誌、新聞での宣伝もされていますが、インターネット・ホームページにも期待します。諸ブロックでの活動が会員相互を生かし、キリストの手紙（Ⅱコリント三・三）が諸教会でまず読まれてゆくものとなりますように。

（ＪＣＰ理事長）

このニュースレターは初めての試みとして、主題【春】にちなんだ作品を掲載しました。二〇〇五年が全世界にとって神の祝福に満ちたすばらしい一年となりますよう祈りつつ、十五名の会員が書き上げました。

春遠からじ

坂口　良彬

「来たりなば春遠からじ」ということばがあるが、この時期に発行されるニュースレターは、やがて吹いてくる春一番の前奏を思わせる薫風ではなかろうか。

春というと、教会の暦で頭に浮かぶのはイースターだ。イエス・キリストが十字架にかかった時、弟子達、そして関係者は、厳冬の氷の中に突き落とされた思いだった。

だが、主イエスは三日目に死者の中からよみがえって弟子達の前に現れた。これは、弟子達にとって、トマスが傷跡をさわってみなければ信じなかった程の驚きだった。

主イエスの復活後,五旬節にペンテコステを体験し、聖霊に満たされて力強く伝道に進みはじめた弟子達は、春らんまんのような華々しさでいっぱいだった。

ところで春には、各教会も新年度に入り、今年もがんばろうと体制作りを行う。

クリスチャン・ペンクラブでも、それぞれに書こうといさみ立って春を迎え、夏期学校へと向かっていく。文章上達には、王道がないといわれるくらい、道は険しい。うまく書けないことが続くと、誰もが落ち込んでしまう。

だが、この苦しみを謙遜に受け止める努力をしていけば、神は、恵みに満たされた気持ちを与えてくださるのである。

祈りに始まり、祈りでまた次の展開に臨むとき、春は眼の前に来ている。師のために祈り、また友のために祈るとき、神はクリスチャン・ペンクラブに新しい躍動、展開を与えてくださる。

基本的なことではあるが、毎日のように本を読み、毎日のように文章を書き,各ブロックの励みに刺激を受けて自らも励んでいこう。

讃美歌に「忍びて春を待て、雪はとけて花は咲かん」とあるが、患難の続く冬をじっと耐えることによって、希望を象徴する春に到達できる。

一年が春夏秋冬でできているのと同様に、春に咲いた希望を夏、秋に展開して、試練の冬を耐え、また花咲く春を迎える。

私達が、肉体の死を前にして、輝いている春は永遠の生命ではないだろうか。

今年一年間、皆さんの文章を愛読して、神の恩寵の中にはぐくまれることを祈ってやまない。

光を求めて

駒田　隆

明治の情熱的な歌人、与謝野晶子の詩の中に「君死にたまふことなかれ」というのがあります。

「あゝをとうとよ君を泣く／君死にたまふことなかれ／末に生まれし君なれば／親のなさけはまさりしも／親は刃をにぎらせて／人を殺せとをしへしや／人を殺して死ねよとて／二十四までをそだてしや」（原文のまま。「明星」一九〇四年）、と続いていきます。

日露戦争の最中にこの詩が公表された時には、多くの人々は彼女を非難したと言います。姉と弟という肉親関係の情愛の中から生まれたこの詩には、戦争に対する庶民の率直な気持ちが滲み出ています。誰が、自分の肉親の死を願うでしょうか。お国のためだ、と表面的に装っても涙の出ない親がいるでしょうか。

旧約聖書の中の文書で、戦争の記事がないのは、ルツ記と雅歌だけだと言われます。聖書には、イスラエルの民が、カナンの地を平和のうちに自分のものにしたとはありません。むしろ、聖戦・聖絶、などと凄まじいほどの記事が多々あります。わたしなど大平洋戦争を経験した者にとって、初めて旧約聖書をひもどいた時は唖然としたものでした。十戒の第六「殺すなかれ」は、誰のためにあるのかと。しかし、「平和を実現する人々は幸いである。その人は神の子と呼ばれる」（マタイ五・九）、とある箇所に接した時、わたしは心に安らぎを覚えました。イエスは、当時のユダヤ社会からメシア、それもローマ帝国からの解放者として期待されても聖戦を呼びかけませんでした。イエスが伝えたのは、愛に満たされた福音でした。福音書にあるのは「敵を愛し、自分を迫害するもののために祈りなさい」（マタイ五・四三～四六）、と勧めるイエスの行動でした。

二十一世紀が開かれた時、人々はこの世紀こそ平和の世紀にしたいと望みました。けれどもその望みは空しいものでした。この新世紀もまた戦火に明けていったのです。イエスはそれを望まれておられるのでしょうか。

学徒兵田辺宏は、「雪の夜」という詩の中で歌っています。

「人はのぞみを喪っても生きつづけてゆくのだ。／見えない地図のどこかに／あるひはまた遠い歳月のかなたに／ほの紅い蕾を夢想して／凍てつく風の中に手をさしのべている／手は泥にまみれ／頭脳はたゞ忘却の日をつづけてゆくとも／身内を流れるほのかな血のぬくみをたのみ／冬の草のように生きているのだ……」（「聞けわだつみのこえ」一九四九年）。

イエスは、「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる」（マタイ七・七）、と言われました。平和を求めて叩こうではありませんか。求めなければ、門は開かれないのです。わたしたちの拳で、平和の光を求めて、門を叩こうではありませんか。平和な春を呼ぶために。

十冊目の日記帳

柴田　知子

私の愛用している日記帳は婦人之友社から出されている「主婦日記」である。B五サイズの半分の大きさで、厚さは一センチ大である。スケジュール表と毎日の予定や行動したことを書く、書き込み的な日記である。私は一九九六年から使用しているので、二〇〇五年の新春からは十冊目となる。

最初の三年間はこの日記の使い方通りに書き込んでいた。

四年目の一九九九年から、私流に使い出した。スケジュール表はそのまま使い、あとのページをスクラップ帳のようにしたのだ。自分の気に入った雑誌のカラーページや内容、教えられた新聞記事、見識者の文章、美術館や音楽会のチケット、聖書の御言葉、その時々自分の心に響いた感動したものを貼り出したのである。二〇〇二年はクリスチャン・ペンクラブ五十周年記念大会のカラーコピーの記念写真も貼った。

この日記は現在の自分の思いを書き込むことよりも、自分の目指したいもの、自分の夢、理想とするものが詰まったものとなっている。私はいわば雑誌の編集長といった感じである。このカラフルな日記帳を見るたびにうれしくなる。

しかし、これには私のスケジュールや行動したことも書くし、収入や支出も簡単に書くので、独身者の家計簿にもなっている。

二年前、横浜から三島の自宅に帰る列車の中で、私はこの日記帳を満足して見ていた。

熱海から一人の老婦人が乗って来て、ボックス席の私の前に座った。私のカラフルな日記帳を見て不思議に思われたのだろう。

「それは何ですか？」

と声をかけてきた。私は説明した。

老婦人はペンとメモ帳を取り出して何か書いていた。別れ際になって名刺をくれた。

『フリーライター・精神経済学／歌田久子』

手書きで著書名も数冊書いてあった。伊豆修善寺在住らしい。達者な方であるなあと思った。

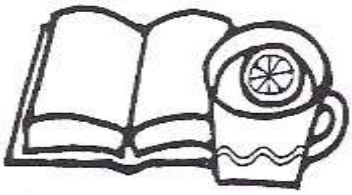
二〇〇三年五月、私は本を出版したのでその方を思い出してはがきを出した。本の注文が来た。早速郵送すると、読んだ感想の手紙が便箋七枚にもわたって、美しい達筆な文字でしたためられており、ご自身の著書『ふと立ち止まって』（静岡新聞社発刊）も同封されてあった。

二〇〇五年春、

私の日記帳も十冊目を迎える。

この年、私はこの日記帳に

何を刻むであろうか。



いやだなあ、面倒くさいなあ
これで人生は負けいくさ

川上与志夫

質問します。

面倒だなあ、いやだなあ、どうしようかなあ、と思ったことがありませんか。きっとあるでしょう。わたしも大ありでした。

朝の散策。気持ちがいい。健康にいい。食事がおいしい。一日がスカッとする。いいことずくめ。それなのに、今日はちょっと朝寝坊。仕事は山積み。散歩なんて面倒だ。雨にやられるのもいやだし。どうしようかなあ……。やっぱりやめとこ……。

日課に決めた散策は、かくして一週間で終止符。一ヶ月もつづけば上出来だ。運動不足で胃が重い。便通にも元気がない。ほらまた腹が出てきた。糖尿がこわいぞ。あいつも脳梗塞で倒れたっけ。このままだと、やばい。でも、散歩も運動も面倒だ。

行き着くところは医者通い。せっかく新調したスニーカーもお蔵入り。

意思が弱いと、あらゆることに「面倒で、いやな思い」は伝染する。

脱いだズボンを吊るさない。はこうとしたらしわだらけ。アイロンかけなきゃならなくなった。掃除も皿洗いも面倒だ。トイレ掃除なんてまっぴらだ。なに、不意の客が来たらどうするかって？　かまわん、そんなの門前払いだ。喫茶店を茶の間にすればいいのさ。

お世話になったあの人に、礼状を書かなくっちゃ……。でも面倒だ。そのうち、そのうち、一日のばし。気は重くなるばかり。はがきですんだものを、遅れたばかりに丁重な手紙を書くことになる。言い訳だって考えなくっちゃ。面倒が面倒を生みつづける。

重い気分で過ごした時間と失った信用。ああ面倒だ、ああいやだ。これで人生は、果てしなく下降線をたどる。

歯医者に行かねばならない。いやだなあ、あのキンキンした削る音。突然襲う、あのチクっとした痛み。この藪医者め！しっかりやらんかい。ああ、思うだけでぞっとする。面倒だなあ、いやだなあ、行くのやめようかなあ……。そうこうしているうちに、穴埋めですむ治療が抜歯となる。痛さも費用も数倍にふくれる。あげくの果ては入れ歯の行列。

「〇〇商事のＡ社長、胃がんで手術したんだってさ」

「そうか・・・。彼、人間ドックをいやがっていたからなあ。手術ぐらいで運がいいよ。同期のＢ君。あいつなんか、心臓麻痺であっさり逝ってしまったんだから」

面倒だなあ、いやだなあ、どうしようかなあ、なんて思っていたら日が暮れる。人生には、そんなゆとりはないはずだ。

「念ずれば通ず」というではないか。「念」という字は「今」の下に「心」と書く。今の心で突っ走れば、万事はうまくいく。

「ニコニコと」すぐにやってのければいいのさ。ただそれだけのこと。それが人生。

春の悦びを知った愛娘

藤本優子

「お母さん、私ね。この頃、桜の花が好きになって立ち止まって見てしまうの」と言うと、「年を取ってきた証拠やね」と、母は微笑んだ。私が三十五歳を過ぎた頃のことだったと思う。

収穫の秋や、人生の収穫を実感するのも大きな喜びであろうが、私は春が好きだ。厳寒の冬を過ごしたからこそ感じられる春の足音。二月の終わり頃になると、寒さの中にも日差しは春を感じさせ、まもなく春の訪れまで一直線となる。

季節は常に順序よく春夏秋冬を繰り返すが、人生の四季は夏から急きょ冬を迎える場合もある。また、ライフサイクルで言われる「春」が、十～二十代の楽しい時であろうと、その時期が苦しみに満ちたものであることもある。問題教師によるいじめに始まり、父親のこと、家庭不和、最愛の祖母の難病と、本人の責任とは関係のない苛酷な苦しみは、長女を暗闇へと追い込み、その心と身体を病ませてしまった。何よりも私達夫婦自身の問題ゆえに、娘を苦悩の深淵に追いやったのである。

人は悲哀に徹して、いや応なく神のもとに追い込まれ、試練に耐え忍ばせ、長い年月を経てついに神を知る。神は責任を持って、そこまで至らせて下さり、あとで振り返った時、神はどんな時にも最善を尽くして下さっていたことを知る。この境地こそが春の悦びである。

「美しい」と「きれい」が違い、「悦び」と「楽しい」が違うように、苦しみを乗越えられたからこそ味わえる悦びが、春の悦びに喩えられよう。その時、ライフサイクルで言うところの春の盛りが過ぎていようとも、その若者は、神との交わるすべを知り、これからの長い人生を神の恵みの世界に生かされていく。

試練の時は、誰しも神が恨めしくもなろう。しかし、どんなに苛酷な人生であっても、時が来れば、必ず神が苦しみを取り去って下さるのだ。人生の晩年にこそ最大級の春が来る。その祝福が来た時、今までの苦しみとは比べものにならない悦びに包まれる。神は、私達に永遠なる「春」の悦びを与えようとして、苛酷な試練を許しておられるのであるが、このことを受けとめることができるまで、人はどれだけ苦しむことか。

理屈に合わない人生の苦悶を通して、娘の魂も開花し始め、大きな苦しみと悲しみをくぐり抜けた時、「春」の悦びを知る者とされた。生あるうちは何度も小さな春を経験し、地上の闘いも終わりに達した時、イエスを信じる者は、とてつもない悦びに満ちた春の世界へ移される。魂が躍るではないか！晩年こそが神の祝福に与る時。完全な春の中で永遠に生かされるのだ。イエスが復活された時も、万物復興の春であった。ハレルヤ！

『悲しんでいるようであるが、常に喜んでおり、貧しいようであるが、多くの人を富ませ、何も持たないようであるが、すべての物を持っている』（第Ⅱコリント六章十節）

私の心は揺るがない。愛娘二十七歳の元旦に。

たまご色のふれあい

西山純子

学生の頃から　ずっと
少年の　香りのする人でした
ヒョイと　身軽に　難所も飛び越えて
少し　うれしそうな　照れたような様子で
振り返る　それが自然で憎めない
他人の　長所は　的を射た
スマートさで　ほめてくれる優しい人でした
どの集まりにも
居てくれて　当たり前の人でしたから
この世からの旅立ちの　葬儀の場に立っても
「来てくれて　ありがとう」と
ニコニコ顔で　迎えてくれそうで
つらい　哀しさ　寂しさも
遺してくれはしたけれど
わたしには
柔らかい　温かい　爽やかな風と色も
置いていってくれました

春になる前に、一人の友人があっけなくこの世から立ち去っていきました。彼とはもう、夫婦そろっての遠足で談笑することも、混声合唱で一体感を共有することもできなくなりました。

彼はキリスト教の信仰を持っていませんでしたが、神は黄泉にまで下ってくださり、彼を救ってくださると信じ、祈っています。

わたしには、春を思うと何故か決まって浮かんでくるイメージがあります。それは、ふわふわした雛の柔らかなたまご色です。イースターのカードに描かれた雛の絵やたまごの連想があるのかもしれません。

いつの頃からか、春はふわふわ、たまご色とハミングのように心の中はこだまして、復活の色として新春を迎えるようになりました。

フィリピの信徒への手紙四章一一～一三節に聞きます。

わたしたちは、どのような状況に置かれていても神によって、日々必要な賜物を与えられ生かされています。（自分にとっては足りないと思っていたとしても）神は満たしてくださっています。今の境遇に満足することを、習い覚えさせていただいています。永遠の命を約束していただいている者は、だから悲しみに沈むことはないと示されています。

キリストの十字架は、血の色。復活の色はふわふわした優しいたまご色なんかじゃないと、否定されるかもしれません。

でもわたしにとって春は、たまご色です。

悲しみも痛みも憤りも、みんな神さまからいただいた賜物です。けれど、痛みはきつくて耐えにくいです。それを大きな腕で抱きとめて包み込んでいただける、全身を温かい胸に委ねきれるその方は、今のわたしには血の色を覆って余りある、ふわふわなたまご色のイメージなのです。

春の奇跡

島田　裕子

「わたしは、春が来るのを楽しみにしています」

これは、七、八年前に放送されたテレビドラマ「ピュア」の知的障害のある主人公のセリフです。主人公の純粋な瞳とともになぜかこのセリフがいつまでも心に残っています。

春は奇跡の起きた季節です。三十年も前のことですが、わたしは幼稚園教諭をめざして神戸の「頌栄」という保育科の短大を受験しました。ところが結果は補欠の十番。高校の担任から、偏差値では大丈夫と太鼓判を押されていたので、「頌栄」しか受験しませんでした。音楽の実技テストで歌をうたったとき、あまりにも緊張して先生方の方を向かず、横を向いて歌ってしまいました。そのことで一抹の不安は感じていました。そして発表の日。合格者の中に自分の受験番号をみつけることができず、真っ青になりました。一緒に見にいった母が「補欠十番だって。どういうこと？」とつぶやきました。

補欠は二十番までありました。学校に問い合わせると、「毎年十人くらいは合格しても入学しない人がいます。そやけど、その年によって違いますわ。繰り上げ合格になる場合は、四月四日に連絡しますから」といわれました。

あまりあてにできないので、二次募集をしている他の保育科の短大ふたつを急きょ受験しました。ひとつは合格し、ひとつは不合格でした。でも、わたしは「頌栄」をあきらめきれずにいました。就職率百％と聞いていたからです。

繰り上げ合格者の決定する四月四日。近所で親しくしている方が家族を昼食に招待してくれました。朝から電話を待っていたので留守にできず、母とわたしは交替で出かけました。そんなふうにして待っていたのに電話はかかってこないまま夜になってしまいました。夜九時過ぎ、「頌栄はあきらめるしかないね」といって、妹とオセロをして気を紛らわしていました。

リーン、リーンと電話が鳴りました。「おめでとうございます。補欠九番の人が断りはったんで、合格です」という言葉に涙があふれました。母と妹と手を取りあって「ばんざーい」と叫びました。

その翌々日が入学式でした。ミッションスクールである頌栄の入学式は、神戸教会で行われました。生まれて初めて教会に行ったのがその時です。頌栄で、聖書も初めて手にしました。教会に導かれたのは卒業後ですが、頌栄に入学していなければ、教会に足を運ぶことはなかったでしょう。神さまは、わたしをキリストに導くために奇跡を起こして下さったのだと思います。

もうひとつ春に奇跡が起きました。
それは三年前、クリスチャン新聞の
「あかし文学賞」に入選したことです。
そのことによって
クリスチャンペンクラブに導かれました。
そこで素晴らしい方々との出会いが
ありました。
主の復活された春。
「わたしは、
春が来るのを楽しみにしています」

わたしは　わたし

槙　尚子

アガサ・クリスティーはわたしが好きな作家の一人である。

もうずいぶん前、図書館に行くと、いつも彼女のコーナーの前にいた。立ち読みをしながらまだ読んでいない本を探すのが、そのころの楽しみだった。多くはミステリーだったが、イギリスの社会を知ることもでき、ちょっとしたガイド本でもあった。

何気なく借りた本、それは「春にして君をはなれ」だった。そう厚い本ではなかったが、読み進めていくうちに、ミステリーではないことがすぐにわかった。

この本は女性の自立の本だった。家族の中心として生きていると思っていた女主人公があるとき、飛行機事故にあい、見知らぬ土地で長い時間を過ごすことになった。その時彼女は自分と対峙することになる。そして自分は、実は自立した生き方をしていないことに気づかされるのである。

読んだ後の感動は、今でも覚えている。

若いころから、わたしは絵を見るのが好きだった。ふらりと美術館に行く。あるとき、窪島誠一郎の信濃デッサン館に夫をさそった。夫はすぐに飽きてしまい、気がついたら喫茶室でコーヒーを飲んでいた。「僕はもういいから」と。長野県内の美術館をいくつか回ったが、夫はどこに行ったのか全く覚えていなかった。

以来わたしは単独行動をとるようになった。友人は「あなたの家はみんな自立しているのね」と言った。わたしも、一人で旅行できること、映画を見られることを、自立のあかしのように感じていた。なぜなら周りには集団で行動する人が多かったから。

しかしこの頃思う。なにかを選ぶとき、なにかを決めるとき、人に頼ることが多いのではないだろうかと。となりはなにを選んだか、あの人はどうしたいのか、いつも気になるのである。夫が選んだからそれでよいなんて、なんと平易な生き方だろうか。一緒にみる映画だったら相手の趣味に合わせてもよい。しかし大きな決断には「わたし」が大事ではないだろうか。同じ決断でもかまわない。わたしが関わったことが大事なのだから。

クリスティーの本の女主人公ははっと我に帰ったとき、それまでの人間関係が大きく変わってきた。はたからみればきのうと同じなのに、自分が変わることで関係が変わったのだ。

神様がつくってくださったわたし。わたしはわたし。平凡な、どこにでもいるおばさんだが、神様ここにいます、あなたを証しています、と胸をはって生きていきたい。人まねでなく、人に決めてもらうのでなく。

創作　来年の春には

三浦喜代子

咲子は若い日からの信仰の友、みどりからしきりに旅の誘いを受けている。いささか辟易気味だ。

「来年の春にはぜひ実現させましょうよ」

みどりは海外に出かけようというのである。頻繁に電話してくる。会えば手を取らんばかりにしてくり返す。

「そうね……」

咲子はそのたびに語尾を曖昧にしてきた。胸がつまって、先が言えないのだ。

―あなたにはわかっているはずよ。この一年の私の状況が。私に、来年の春があると、本気で信じているの。気やすめを言っているだけでしょう―

桜前線が日に日に北上している三月中旬の午後、咲子はまたみどりから言われた。

「来年の今ごろ、出かけましょう。よさそうなツアーがあるのよ。あなたの好きなアンデルセンの生誕地も入っているの」

アンデルセンと聞いて、みどりが本気なのが伝わってきた。それならと、声に出して訊いていた。

「私に来年の今ごろがあると思うの。来年の春なんて、私にあるかしら…」

「そう、ないと思えばないかもしれない。あると思えばきっとある。私はあなたの春を信じているわ。主にあって希望を持ってる。希望は失望に終わらない、でしょ」

「……」

強気でたたみかけられて、咲子はまたひるんだ。

―でも、知ってるはずでしょう。私のこの一、二年のことを。去年、病院の中庭の桜が散り尽くした四月十九日に、夫は死んだわ。一年八ヶ月、戦い抜いて―

半年もしない内に咲子は子宮ガンの手術を受けた。初期ではなかった。いまだに術後の治療が続いている。ひそかに転移も覚悟している。

―みどりさん、あなたはずっとずっとそばにいてくださったわ、まるで小さなイエス様のようだった…

今の私には、外国よりも御国への旅を考える方が自然じゃないかしら―

そう自答しながらも、天国はまだ遠くに思えてしまう。

里桜が満開になり、八重桜の枝が蕾でしなう頃、咲子は聖書の記事を思い出した。アブラハムの老妻サラを。

『来年の今ごろ……、男の子ができている』

サラは信じられなくて思わず笑ってしまった。神はサラの不信仰をたしなめられた。

あなたの春を信じている、希望は失望に終わらない。みどりの明るい声が響いてくる。

そうね、希望を持たないのは
神さまへの不信仰かもしれないわ。

咲子は、久しく開かなかったアンデルセン全集の一冊に手を伸ばした。

春の色

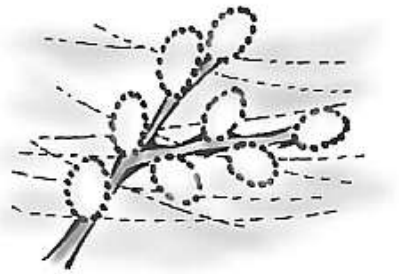
堀川きみ子

大晦日に、思いがけず雪が降る。
みるみる真白に変わってゆく町並。モノトーンの静かな世界。二〇〇四年（災）といわれた年が終わる。
町角に、ピンクの耳の熊さんの雪ダルマがあった。お腹を刳り貫いて、中には三本のローソクが赤々と燃えていた。あまりに見事で美しく幻想的な姿に驚いた。雪国の人が作ったものか素晴らしい出来栄えであった。

この雪ノ下に今、眠っている春の生命たちよ。
やがて春が来れば顔を出すよもぎたちよ。
あなたの姿を見ると思い出す。

高校生のときの娘の制服が、このよもぎ色だった。あの頃から、この色の制服は珍しかった。娘はこの一校だけを希望し入学した。
野球部が初めて高校野球大会に参加した年でもあった。
聖望学園高校の放送部は、全国大会レベルの活動をしていた部であった。校内放送のテレビ中継を始め、司会、朗読、ナレーション、ビデオ作品の創作などが盛んであった。

厳しい中にも優しさのある顧問の先生のもとで、娘は三年間良き学びをすることができた。N・H・Kの放送コンテスト、ビデオ作品のコンテスト大会、表彰式に参加し貴重な体験をすることができた。
話すことは大切なこと。正確に相手に自分の気持を伝える、表現する技を知っていることは素晴らしい。話すべき時に整理して、ことばをはっきり、基本の発声を、訓練されたものは小さい声でも遠い所で話しても実によく通るのである。話すことに不得手な私は、いつもうらやましく思っている。



春の色のイメージは、
ピンク、黄色、紫と
カラフルで明るい色を
思い浮かべるが、
私は二十数年経った今でも、
このよもぎ色の制服の
子ども姿を見る度に、
懐かしく、
また春の色を感じるのである。

緑の牧場

山本　披露武

つくしを食べながら弟が目を丸くしている。
「おいしいなあ、つくしの佃煮は。兄ちゃん、ぼくあしたも採りに行きたい」
「うん、行こう。あしたもいっぱい採ろう」
次の日もいっぱい採ることができ、それからは毎年のように春になるとぼくたちはつくしを採りに行った。
ある日弟と二人で明石公園に行き、池のほとりやグランドのまわりなどつくしが生えていそうなところを探しているうちに薄暗い竹やぶの中に迷い込んでしまった。
「兄ちゃん、キツネに化かされたんやろか」
「そんなことない。ちょっと迷っただけや」
弟が心配するといけないと思い、そう言って辺りを見まわすと、二十メートルほど離れたところに弱い光が差し込み、かげろうのように揺れている。まるでその光が、
「さあ、早くこちらへいらっしゃい」
と、ぼくたちを招いているように見える。
「兄ちゃん、やっぱりキツネやろか」
「ちゃう、ちゃう。そんなことない」
とは言ったもののやっぱり気味が悪い。背中のあたりがゾクゾクッとする。それでも勇気を出してそろりそろりと光の方へ近づいて行くと、驚いたことにそこは緑の牧場。しかも足の踏み場もないほどつくしがいっぱい生えている。ぼくたちは飛び上がって喜んだ。
「兄ちゃん、夢とちゃうやろか」
「夢やない、ほんまのつくしや。ええとこ見つけたなあ、だれにも言うたらあかんで」
「うん。二人だけの秘密や。兄ちゃん、来年もまた来るやろう」
「来る、来る」
ぼくたちは大はしゃぎをしてつくしを採り、意気揚々と家に帰った。
ところがどうしたわけか、その次の年につくしを採りに行ったという記憶がない。あれほど約束をしておきながら秘密の場所へも行っていない。それだけではない。その後何年もつくしを採りに行っていないのである。どうしてだろう。そう思って弟に尋ねてみたが弟も思い出せないと言う。それでも考え続けているうちにようやく気が付いた。空襲があったのだ。それでつくしを採りに行くことができなくなってしまったのだ。
ふたたびつくしを採りに行くようになったのは、娘が小学校に通うようになってからであり、三十年過ぎた今もそれが続いている。
うららかな春の日ざしを受けながら野を歩き、つくしを探していると、平和であることのありがたさがしみじみと感じられ、思わず、

主はわたしの牧者であって、
わたしには乏しいことがない。
主はわたしを緑の牧場に伏させ、
いこいのみぎわに伴われる。
と詩篇二十三編を
口ずさみたくなってくる。

まもなくその春がやってくる。いつもの散歩道を歩きながら、まだだろうかとつくしが顔を出してくれるのを待っているのは、実に楽しいものである。

今こそ春

前山　英子

それが余りに辛く、恐ろしい出来事であったから、本当に長い間思い出さないように、心の扉に鍵を掛けてしまった。今私は、そーっとそれを開いて記憶の一コマを綴っている。

三十五年も前、桜の季節が終わり、空が真っ青に晴れ渡った午後のこと。初めての出産で、胎児と共に死の崖っ縁に立たされた。不憫なことであったがその子は天に召され、私だけが奇跡的に助かった。しかしそれが因で産後の肥立ちが悪く、極度の貧血と肝炎をおこし、すっかり健康を害してしまった。

何事も頑張ってやればできる有能な人間であったのが、ここにきて自分の力の限界を知ることになった。何をやっても出来ない、無能で弱い人間になり果ててしまったのだ。（もう一度元気になりたい。聖書の中にあるいやしの賜物が欲しい）。私は清水の舞台から飛び降りる思いで、信仰の世界に入った。

毎朝、聖書を読んで祈った。祈らないと生きられない。やがてそれが習慣になった。

ゆっくり養生できる環境にはなかった。弱い身体で会社へ行って働いた。そしてさらに、キーパンチャー病にかかった。

職場では他人の後について歩き、中途半端な仕事に甘んじなければならなかった。時にはミスをする。容赦なく「バカ者！」と罵る声が飛んでくる。怠け者となり、自分で自分をどうすることもできない惨めさを噛み締め、涙を流す日々。

一日の戦いに疲れ果て、家に帰り神さまに助けを求める。とある日、

『今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます』というみことばをいただいた。掃いて捨ててしまいたいようなこんな私を通して、神さまはどんな栄光をあらわされるのか。洞穴の中で冬眠する動物のように、聖書の中から救いのみことばを探しつつ、冬の過ぎ去るのを待つより仕方がなかった。私はこの時、虐げられている者の心の痛みや悲しみを知った。そして孤独の極みに耐え、忍耐することの大切さを学んだ。

キーパンチャー病には確かな治療方法はなく、病院へ行っても埒は明かない。当然祈りは神さまに向けられ、信仰の根は土中に深く広く伸び、独自の治療法を探し出すに到った。

それは、温泉療法、アロエエキスの塗布、マッサージ器による萎縮筋肉の伸張、体型の矯正、栄養補給食品の摂取などである。

還暦を過ぎたこのごろになって、

「あなたの病気は治ったのネ」という知人の言葉を聞くようになった。あんなに何もできなかった自分が、今は何でもできる人間に変わっているのだ。生きているのが楽しい。

長い冬眠の季節が終わり、今こそ春が来たのだ。小川のせせらぎ、小鳥の囀りが聞こえる。

眩しい陽光の中で、大海原の岸辺に立って、私は静かに将来を展望している。

よろこび

長谷川和子

「アーアー」背伸びをした僕は、水音が奏でる静かな振動で温かい土の中から目覚めた。

首をのばすと雪のしずくが頭に当たった。あそういえば子守唄のようにきこえていた霜柱を踏むザクザクという音もきこえてこない。小川のせせらぎが心地よくチョロチョロときこえてくる。

「起きよ、春よ」といっているかのようだ。

やがて、日一日と太陽に照らされて溶けはじめた雪は空気中の汚れを吸うかのように表面をおおい、真冬に見せた美しい銀世界とは違う薄汚い雪景色になっていく……溶けることにより自分の働きを失っていく命の終わりでもあり、やがてくる春の幕開けでもあるのだ。

残雪が土に吸収されると今まで眠っていた野の草たちが徐々に体を起こし、陽を浴びるために伸びていく。半年振りに見る土に、村人らは一番に舞う土ぼこりに目をそむけることはないんだ。

「春がきただ」「もう雪は降んないなあ」と全身で風を受けながら畑に出ていくんだ。だって近くの家のお姉さんは竹ぼうきで庭を掃くたびに舞い上がる土ぼこりを見てニコニコしてるし、おばさんが「長靴をはかんでもよくなったなあ」と庭をまわり「カランコロン」と下駄の音を楽しんでいるんだから。

つくしんぼうが顔を出し、水仙、芝桜、チューリップがいっせいに咲き、神社や学校の校舎が満開の桜に包まれると、今まで沈殿していた体中の力を発散するかのように野良仕事に精を出すようになるんだ。

夕闇が下りてくるころ、それぞれが料理の重箱を抱えながら集まってくる。桜の木の下で宴会が始まる。ほてった頬になま温かい風が心地よい。そんな光景を見ていると僕まで嬉しくなる。苛酷な雪国での生活を見ているだけに余計そう思うよ。

桜の花びらが春風にのって舞い散る頃、スカートをはいた少女が「ホラこんなに広がるのよ」と回って見せる。ズボンから解放された喜びを互いにスカートの広がりぐあいで競いあう姿はほほえましいものだよ。

僕の命は細かく刻まれて酢味噌にされてご飯の上に乗っかるか、衣をつけられ天ぷらにされておじいさんの酒のつまみになるかだ……

運良く生きのびても、そのうち頭からフワフワの毛が出て見てくれが悪く、誰にも気付かれないんだよ。稲の苗が勢揃いして緑のジュウタンになる頃、葉をかぶり背丈がのびてくるとすぐ見つかってしまうんだ。

ふきの煮付けや油炒めとなって食卓の一品となるかもしれない……。僕自身もわからない。「すべてお任せ」って心境だね。

もし生きのびたら、山に囲まれた四季の自然を見ることができ、やがて霜とともに枯れはてて土の中でまた眠ることができるかもしれない。全てのものに命を吹きかけて造ってくださる方に身をゆだねることだね。

やがて来る春のために……

『患難をこえて』収支報告書

収入		支出	
項目	金額	項目	金額
売上（郵便振替）	603,000	印刷代（ベーテルフォト）	720,300
売上（現金）	136,000	表紙デザイン	3,000
本部会計より借入	19,481	発送用袋	2,701
（売上未収 11,000 円含む）		送料	32,480
合計	758,481	合計	758,481

2004 年 12 月 25 日

理事会承認済み

事務局便り

三浦喜代子

二〇〇五年新しい年をお与えくださった主の貴い聖名を賛美します。この年、我がＪＣＰが主のよき使命を十分に果たせますように、お互いに祈り、励みましょう。

新年に当たっての祈りの課題

▽理事会の上に主の導きと祝福がありますように。また、理事一人一人が霊肉ともに支えられ、ふさわしい働きができますように。（池田勇人理事長・玉木功副理事長・久保田暁一・川上与志夫・長谷川乃武男・浅見鶴蔵・西山純子・三浦喜代子各理事）

▽各ブロックが祝福されますように。ブロック事務局と担当者が支えられますように。（札幌・日野栄子、関東・三浦喜代子、中部・坂口良彬、関西・長原武夫）

▽会員一人一人が霊に燃えてあかしの文章活動（読み、学び、書き、広げ、本にする）に励めますように。

▽開設したホームページが多くの方々に用いられますように。（アドレスは表紙に記載）

▽あかし文章に関心を抱く方々が起こされ、新規会員が与えられますように。

▽今年も夏期学校が開かれ、あかし新書が出版できますように。

昨年度の会員状況（年会費納入の方）

＊北海道・七名
＊関東・三十九名
＊中部・六名
＊関西・十五名
＊九州・二名　　合計六十九名

◎昨年出版した『患難をこえて』は皆様の多大なご協力でほぼ費用が満たされました。感謝申し上げます。前頁に収支の明細をご報告しました。残部は三十冊です。今後の収支は本部会計に計上します。

本部事務局の働きについて

本部事務局は理事会のもとにあり現在は東京に置かれ、実務は三浦喜代子理事が担当しています。理事会の決議に従ってＪＣＰ全般に関わる活動をしています。理事会の開催、ニュースレターの発行、夏期学校の開催（担当は年によってブロックが担います）あかし新書の発行、販売、ＪＣＰの啓蒙、宣伝、各ブロック事務局との情報交換、交流などをしています。ふだんは会員の皆様と顔を合わせる機会がありませんが、本部事務局の働きのためにお祈りをお願いします。全国各地から電話や手紙、最近はＨＰを読んだ方から問い合わせが来はじめました。資料送付などで応対しています。

本部事務局よりお願い

▼本年度の年会費を受け付けています。納付をお願いします。郵便振替あるいは現金書留で。領収書必要の方はお知らせください。

▼昨年度からの課題文『生かされている喜び―生と死のはざまで―』の最終締め切りは三月末日です。ぜひご提出ください。

▼ＪＣＰのパンフレットや過去に出版したあかし新書入用の方、また宣伝のために使い方はお申し出ください。超廉価でお分けします。

編集後記・その二

✿今回の紙面作りはいくつかのことで初めての試みをしました。ます、ＩＴの力を大いに利用したことです。最近インターネットを開いておられる会員が増えてまいりましたので、原稿は直接添付ファイルで送っていただきました。寄せられた原稿を直接画面上で一定のフォームに編集しました。その結果製版まではプロの手を借りずに済みました。おかげで時間も費用もだいぶ節約できました。

ペンクラブにも時代の春風が吹き始めたようです。　　三浦喜代子